

周縁から中心へ，そして中心なき周縁へ —— Muriel Spark の *The Go-Away Bird* を読む

遠藤 健一

要 旨

Muriel Spark の小説 *The Go-Away Bird* を植民地主義における〈中心-周縁〉という参照枠で読んだ場合、ヒロイン = Daphne は南アフリカのポスト植民地主義的状況の犠牲者として読みことができる。Daphne の短い生涯の最期で明らかになるのは、オーセンティックな中心という場所が常に不在であったという事態である。つまり、中心と思しき場所は常に既に周縁化 (=クレオール化) され、周縁と思しき場所が中心なき周縁でありながら、周縁の内部に新たな〈中心-周縁〉が産出され続ける外ないという事態であった。この限りにおいて、Daphne の死は、確かに、ポスト植民地主義的状況下における悲劇的な死と言える。

しかし、小説の最後の最後にさりげなく書き込まれる鳥類学者のモチーフの変奏「ornithologist=RC (鳥類学者=カトリック教徒)」は、カトリックへ転向した作者 Spark の、カトリック作家としての書くことへの自嘲気味の (とはいえ覚悟の上での) 宣明としても読めるのではないか。Daphne の生を弄んだ大衆作家 Ralph に自らを重ね書きする作者 Spark。ストーリー・レベルで Daphne の生を蹂躪する Ralph とディスコース・レベルで Daphne の生を蹂躪する Spark。 *The Go-Away Bird* の「三人称、神の(如き)全知の語り」は、カトリック作家としての Spark の選択の余地のない語りであった。Daphne の死もまた、等並みな悲喜劇的なひとりの死と言える。

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

そして、地政学的な〈中心-周縁〉関係もまた神学的な〈中心（神）-周縁（人間）〉関係の周縁に回収される外ないのである。

ハンドアウト

目次

1. はじめに： Muriel Spark, 〈中心-周縁〉という概念装置, 〈クレオール〉という概念装置
2. 南アフリカの植民地の歴史
3. 南アフリカの言語状況
4. *The Go-Away Bird* のストーリー（物語内容）とディスコース（物語言説）
5. Daphne の生の軌跡と 〈中心-周縁〉, 〈中心なき周縁=クレオール〉という現実／真実
6. おわりに： Daphne の死は悲劇的か喜劇的か？ポスト植民地主義的読解を超えて

1. はじめに： Muriel Spark, 〈中心-周縁〉という概念装置, 〈クレオール〉という概念装置

(1) Muriel Spark (1918-2006)

Dame Muriel Spark (born Feb. 1, 1918, Edinburgh, Scot.—died April 13, 2006, Florence, Italy), British writer best known for the satire and wit with which the serious themes of her novels are presented.

Spark was educated in Edinburgh and later spent some years in Central Africa ; the latter served as the setting for her first volume of short stories, *The Go-Away Bird and Other Stories* (1958). She returned to Great Britain during World War II and worked for the Foreign Office, writing propaganda. She then served as general secretary of the Poetry Society and editor of *The Poetry Review* (1947-49). She later published a series of critical biographies of literary figures and editions of 19th-century letters, including *Child of*

Light: A Reassessment of Mary Wollstonecraft Shelley (1951; rev. ed., *Mary Shelley*, 1987), *John Masefield* (1953), and *The Brontë Letters* (1954). Spark converted to Roman Catholicism in 1954.

Until 1957 Spark published only criticism and poetry. With the publication of *The Comforters* (1957), however, her talent as a novelist—an ability to create disturbing, compelling characters and a disquieting sense of moral ambiguity—was immediately evident. Her third novel, *Memento Mori* (1959), was adapted for the stage in 1964 and for television in 1992. Her best-known novel is probably *The Prime of Miss Jean Brodie* (1961), which centres on a domineering teacher at a girls' school. It also became popular in its stage (1966) and film (1969) versions.

Some critics found Spark's earlier novels minor; some of these works—such as *The Comforters*, *Memento Mori*, *The Ballad of Peckham Rye* (1960), and *The Girls of Slender Means* (1963)—are characterized by humorous and slightly unsettling fantasy. *The Mandelbaum Gate* (1965) marked a departure toward weightier themes, and the novels that followed—*The Driver's Seat* (1970, film 1974), *Not to Disturb* (1971), and *The Abbess of Crewe* (1974)—have a distinctly sinister tone. Among Spark's later novels are *Territorial Rights* (1979), *A Far Cry from Kensington* (1988), *Reality and Dreams* (1996), and *The Finishing School* (2004). Other works include *Collected Poems I* (1967) and *Collected Stories* (1967). *Curriculum Vitae* (1992) is an autobiography. Spark was made Dame Commander of the British Empire in 1993.

(<http://global.britannica.com/EBchecked/topic/558274/Dame-Muriel-Spark>)

(2) 〈中心—周縁〉という概念装置

植民地主義における〈中心—周縁〉：宗主国—植民地（植民地主義的支配—被支配関係）

「ここで立てなければならぬのは、次の問いである。すなわち、戦後日本の「国体」ともいうべき日米安保体制もまた犠牲のシステムであり、そこで犠牲とされたのはまさに沖縄ではなかったか。〔中略〕もちろん、両者〔福島と沖縄〕の違いを軽視することもできない。「銃剣とブルドーザー」で建設され、そのまま居座り続ける米軍基地と、立地自治体からの誘致を前提とする原発とは同じではありえない。だが、その他もろもろある違いを踏まえたうえで、両者の類似点を考えていくと、そこに浮かび上がってくるのはやはり一種の植民地主義ではないか、という思いを禁じえない。戦後日本国家は、一つには米軍基地の沖縄への押しつけというかたちで、もう一つには原発の地方への集中立地というかたちで、中心と周縁とのあいだに植民地主義的支配・被支配の関係を構築してきたのではないだろうか。」（高橋哲哉『犠牲のシステム：福島・沖縄』集英社、2012：73-74）

(3) クレオールという概念装置

「クレオール」

- ① 〔Creole〕植民地で生まれたネイティブ以外の人々。本来はスペイン語で「クリオーリョ」といい、新大陸生まれのスペイン系の人々を指したが、後、植民地生まれの白人を指すようになり、やがて混血、さらにアフリカ系をも含むように意味が広がった。
- ② 宗主国と植民地などの二つの言語が混成した言語。母語とする話者をもつ点で、ピジンと区別される。

（松村明編『大辞林第三版』三省堂、2006；750）

「クレオール文化」

「(文化というものを考える際に) 静止的な「地域的伝統」(local tradition) が、ダイナミックで侵略的な「グローバリゼーション」と衝突すると捉えるよりも「ローカル」な文化と「グローバル」な文化が相互作用して互いに構成し合う、より複合的でより可変な形成方式を検証することが、大変重要になってきています…。ウルフ・ハンネッツや他の論客たちが提起した「クレオール文化」概念のほうが、より有意味です…。ハンネッツが考証したごとく、言語学的な意味での「クレオール」とは、現代社会における文化相互作用のプロセス理解に有効なヒントを提供してくれています。

言語学における研究では、多様な型を持つ「クレオール」の形成が指摘されているのは、ご存知のとおりです。植民者側のハイラーキーによるターミノロジーでは、“basilects”, “acrolects”, “mesolects” と三分類が成されています。

“basilect” あるいは “low language” とは、植民者の語彙が “native” の文法に編入された時に形成されます。

“acrolect” あるいは “high language” とは、それとは逆に植民者の言語に基礎を置く文法に、植民地化された “native” 言語の語彙が組み込まれて形成されるクレオールの形態です。

“mesolect” あるいは “middle language” とは、前二者の中間に位置する無数の形態です。」

(モーリス・鈴木テッサ「多様性をフォーマット化する — ローカルな知とグローバリゼーションの文法」荒このみ・谷川道子編『境界の「言語」— 地球化／地域化のダイナミクス』新曜社、2000：28-30)

「クレオール主義」

「クレオール主義」とは、なによりもまず、わたしたちの言語・民族・国家にたいする自明の帰属関係を解除し、そのことによって自分という主体のなかに、四つの方位、一日のあらゆる時間、四季、砂漠と密林と肥沃な大平原とをひとしくよびこむことなのだ。固有言語の閉鎖空間を離脱して複数のことばの主体的併用を選択し、民族の境界を踏えて混血の理念を実践し、国家という制度からの意志的なエミグレーションをこころみること…。国際化やバイリンガリズムやトランスナショナルといった標語からもっとも遠いところで、「クレオール」のエシックスは、いま世界のすべての住人にそれぞれの単独性にたった連帯をうながしはじめている。」

(今福龍太『クレオール主義』青土社、2001: 281)

2. 南アフリカの植民地化の歴史

先住民族：コイコイ (Khoikhoi 牧畜／Hottentot)；サン (San 狩猟／Bushman)。

紀元後3世紀頃：バントゥー系民族 (Bantu peoples) の南下。

1652年以降：オランダ東インド会社による Jan van Riebeeck の派遣。ケープ植民地の成立とオランダ系移民の増加。ボーア人(後に、アフリカーナー人)。加えて、フランスのユグノーをはじめとするヨーロッパ系プロテスタント移民。

18世紀末：イギリス人、金やダイヤモンドの鉱山資源を求めて到来。やがて、ケープ植民地を占領。

19世紀初頭：オランダからケープ植民地をイギリスが正式に譲渡。イギリスからの移民増加。グレート・トレック。アフリカーナー人 (Afrikaners) の諸国家成立 (ナタール共和国, トランスヴァール共和国, オレンジ自由

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

国)。ナタールは 1840 年代にイギリス・ケープ植民地に併合。

1880-1881 年：第一次ボーア戦争（イギリスの敗北）。

1899-1902 年：第二次ボーア戦争（イギリスの勝利，トランスヴァール共和国，オレンジ自由国をイギリス領として併合）。

1910 年：イギリス，ケープ州，ナタール州，トランスヴァール州，オレンジ州の 4 州からなる南アフリカ連邦として統合，その自治を認める。

1931 年：ウェストミンスター憲章によるイギリス連邦内の一国家として独立。

1939 年：第 2 次世界大戦に連合国の一員として参戦。

1948 年：アフリカーナーを中心とする国民党が政権を掌握／アパルトヘイト政策の実施。

1961 年：イギリス連邦から脱退。立憲君主制に代えて共和制を採用，南アフリカ共和国。

1994 年：全人種参加の総選挙実施。アフリカ民族会議（ANC）が勝利。ネルソン・マンデラ議長が大統領に。

3. 南アフリカの言語状況

1994 年以降の公用語：

ベディ語，ソト語，ツワナ語，スワティ語，ベンダ語，ツォンガ語，アフリカーンス語*，英語，ンデベレ語，コーサ語，ズールー語。

それ以外の使用言語：コイ語，ナマ語，サン語。

*アフリカーンス語（Afrikkans）：かつての宗主国の言語であるオランダ語にフランス語やドイツ語，現地諸語，マレー語，そして英語の影響を受けた典型的なクレオール語。オランダ系白人のアフリカーナー人の他，カラードの一部も母語としている。

Cf. 楠瀬佳子「南アフリカの言語政策 — マルチリンガリズムへの道」『京都精華大学紀要』23号(2002): 52-64.

(1) 共和国の公用語はベディ語, ソト語, ツワナ語, スワティ語, ベンダ語, ツォンガ語, アフリカーンス語, 英語, インデベレ語, コーサ語, ズールー語である。(2) わが民族固有の言語の歴史的に弱体化された使用と地位を認識し, 国家はこうした言語の地位と活用を向上するために効果的で積極的な措置をとらなければならない。(3) 中央政府および州政府は, 公用語の使用, 実用, 費用, 地域状況, 必要性のバランス, 住民あるいは州状況の選択を考慮して, 行政の目的にどの公用語も使用する。中央政府も州政府も少なくとも二つの公用語を使用しなければならない。地方自治体は住民の言語使用と選択を考慮しなければならない。(4) 中央政府および州政府は, 議会や法案により, 公用語の使用を規定し, 監視しなければならない。条項の細則(2)から逸脱することなく, すべての公用語は同等に尊重され, 平等な扱いを受けなければならない。(5) 国会で設立されたパン・南アフリカ言語委員会はつぎの点を促進しなければならない。1 公用語, 2 コイ語, ナマ語, サン語, 3 身ぶり言語を促進させ, それらの言語の発展と使用のために条件を整えなければならない。

(南アフリカ共和国憲法第一章第6条抜粋 楠瀬: 55)

4. *The Go-Away Bird* のディスコース (物語言説) と ストーリー (物語内容)

ディスコース (物語言説)

語りの特徴: 3人称 (異質物語世界的) 語り / 語り手による焦点化 (いわゆる全知の視点) を専ら採用, あるいは, 登場人物による焦点化 (いわゆる

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

る内的視点の徹底した排除* / 速度の変化（情景法（対話）、要約法と省略法の多用）

物語言説の時間あるいはプロット：語りの基準：1934年(b) / b-a-c-d-e
…

*ここでの焦点化については、Goran Nieragden “Focalization and Narration: Theoretical and Terminological Refinements.” *Poetics Today*. 23.4 (2002) : 685-97; 遠藤健一「オニールの焦点化論の可能性」『言説のフィクションーポスト・モダンのナラトロジー』松柏社（2001）; 253-62を参照。

ストーリー（物語内容）

背景：南アフリカのケープ植民地他とイングランド。

主な登場人物：

Daphne du Toit：父方アフリカーナー，母方英国系。ヒロイン，周縁から中心を求め，中心なき周縁にて非業の死を遂げる。その死の意味とは？[ダフネ：ギリシャ神話ダフネに由来，月桂樹の意；du Toit > Dutoit，アフリカーナーの苗字，フランス語由来，ユグノー植民者を含意]

Uncle Chakata (James Patterson)：英国人。Daphneの母の兄。英国的名誉(English Honour)の墨守とクレオール的生の矛盾に生きる。[チャカタ：ネイティヴの名，Patterson > Son of Patrick (Saint Patrick) アイルランド起源の苗字]

Mrs. Chakata：アフリカーナーの出自。英国的名誉の墨守とクレオール的生の矛盾に生きる夫の犠牲者。

Old Tuys：アフリカーナーの出自。代理復讐の試みの挫折と成就。

Donald Cloete：英国人。ヒロインの無償の援助者。Cambridge出身，クリ

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

ケット選手。RFC [イギリス陸軍航空隊 Royal Flying Corp は第一次世界大戦の時期のイギリス軍の陸上航空部隊である。1918年4月にイギリス海軍航空隊と統合され、イギリス空軍の母体となった。] の所属。物語りの現在である 1934 年時点で 56 歳、町役場の職員 (The Town Clerk of the dorp)。Daphne の相談相手にして庇護者。

Ralph Mercer : 英国人作家。Daphne と一番長く関係が続いた異性。創作の手段としてのみ Daphne を利用。‘Go’way’ というオブセッションに、多分、生涯悩まされるはず。

主な出来事の再配列

1922 年 Daphne, Dutch の父と English の母の間に生まれる。

1928 年 Daphne 6 歳。両親の病死によりケープ植民地 (Cape Colony) の農場主である母方の伯父 Chakata の家に引き取られる。

1934 年 Daphne 12 歳。the go-away bird の存在を初めて自覚 / The Coates family, 35 マイル離れた農場に。John Cotes, Mrs. Coates からタバコ・マネージャー Old Tuys と Chakata 一家の特殊な関係の示唆 (Mrs. Chakata の寝室のリボルバーをめぐって)。 / Donald を訪れ、Daphne が生まれる 15 年前に起こった Mrs. Chakata の自殺をめぐる一連の出来事を知る。Tuys を解雇できない Chakata の “English honour” (240)。[テキスト C]

1934-38 年 Daphne 12-16 歳。Daphne 典型的なイギリス美人に。但し、父方の血筋の関係のプロンドが非イギリス的 / 既婚の従姉と一緒にケニヤ旅行 / Mrs. Cotes と一緒にヨハネスブルグに買物旅行。

1938 年 Daphne 16 歳。首都プレトリア [現在は、プレトリア (行政府), ケープタウン (立法府), ブルームフォンテン (司法府) に首都機能を分散] の教

員養成大学への入学許可。

- 1939年 Daphne 17歳。教員養成大学1学期終了の帰郷時、Chakata, Daphne にリボルバーを持たせる。Daphne, Makata's Kraal への訪問、その帰路、Old Tuys に尾行される／クリスマス休暇の帰郷時、市中からの帰路 Old Tuys 運転の車に急接近され、落馬し怪我。校長の Mr. Parker の車で自宅農場まで送り届けてもらって事なきを得る。
- 1942年 Daphne 20歳。プレトリアで教職に就く。R.A.F. 訓練基地でイギリス人パイロットたちにイギリス人であるという理由で“collectively” (246) に魅了される。
- 1943年 Daphne 21歳。幼友達の John Coates, 戦死／イギリス空軍大尉と婚約、翌週、婚約者交通事故死／アフリカーナーのエリートである父方の The du Toits の居住しているケープタウンの学校に。
- 1944年- The du Toits に同居／賜暇で帰郷オックスフォード出身の従兄との交友／「イギリス人らしいイギリス人」と思われた海軍将校 Ronald (“Ronald was the most typical Englishman, Daphne thought, she had ever met.” 248) との婚約／Ronald 既婚者であることが判明／Daphe, Ronald の一件を The du Toits と一緒に生活しているが故の出来事と“irrationally” (249) に考え、イギリス船舶の多い港町 Durban の学校へ。
- 1946年-47年 Daphne 24歳。イギリス Patterson 家へ／出発前の帰省、帰省中の Old Tuys の事件と Donald。[テキスト D]／Patterson 家滞在。従姉 Linda 28歳（交通事故で夫と死別後、実家に。週末には既婚の法廷弁護士との逢瀬のためにロンドンに）。リウマチで苦しむ伯父 Uncle Pooh-bah, 認知症を患う伯母 Aunt Sarah, 介護を必要としている女中 Clara. Linda, Daphne の滞在を歓迎。Linda と Daphne の「場所」

に対する認識の相違（‘How could you leave that lovely climate and come to this dismal place?’ Linda would say. ‘But,’ Daphne said happily, ‘this at least England.’ 253）／ Linda 不在の週末に従兄弟たちが Patterson 家に、Molly と Rat, ‘unhealthy’ (254) であることを理由に、Patterson 家からできるだけはやく出るように Daphne に助言、Daphne はこのような状況をこそ ‘it’s typically English.’ と認識／ Linda との調整の結果、漸く、ケープ植民地の知人の親戚 Mr. and Mrs. Pridham からの招待を受けロンドンに。60 代の整形外科医 Mr. Pridham が Daphne を性的対象に、Mrs. Pridham がそれを意図的に煽るという不健全。従兄 Mole のコメント ‘she hot him up.’ (256) ／ Mole, 友人 Michael Casse 及びその母 Greta Casse を紹介。Greta のフラットにロンドン・シーズンの間（6 月末まで）滞在することに。Greta による法外な請求（下宿代の他、パーティ開催、トイ・プードルなどの購入）。Chakata へのさらなる送金の依頼。Chakata の財政状況の悪化（持ち馬への虫害、タバコの不作；ケニアの長女夫婦の死に伴う孫たちの養育という新たな状況）、翌年分の仕送りを送金。5 月中旬 Greta と訣別 [テキスト E]。Daphne, Henley の私立学校の教員に、Poo-bah と中年の家政婦との 3 人暮らし、Clara は病没し、Sarah はホームに。

1947 年- Daphne 25 歳。春、Linda 病死。Linda の恋人 45 歳の既婚の法廷弁護士 Martin Grindy による Daphne へのアプローチ。夏、Linda に代って Martin Grindy の恋人に。／ Old Tuys の脳卒中の報せが Chakata によってもたらされる／ 秋、Martin の妻、学校に／ Daphne, 同僚の美術教師 Hugh の助言でロンドンの公立学校に／ Hugh の同棲の求めを「神経に触る」(I’ve got nerves.) という理由で拒否、友人としての関係を維持／ Hugh の芸術家仲間達との Soho 地区での交遊。

- 1948年-1950 Daphne 26歳 -28歳。従兄 Mole から、Greta Casse の息子 Michael が 10歳年長の女性と結婚しケープ植民地へ移住との情報を得て、強い郷愁の念に駆られる／Hugh, Soho のパブで、偶然会った同級生の小説家 Ralph Mercer を紹介／Daphne, Ralph と2年間の同棲。Ralph は小説執筆の準備（データ収集）のために Daphne を必要とし、Daphne は Ralph を熱愛する。小説執筆のために Daphne のもとを離れる、そしてフラットからの一方的な退去勧告と離別 [テキスト F]。
- 1950年- Daphne 28歳。失意のうちに植民地に帰郷。脳卒中の後遺症で過去の怨念から解放されている Old Tuys。Chakata はもはや 'a goad for Old Tuys' ではない Daphne を必要とはしていない。(It struck Daphne that she was useless to Chakaata now that she was no longer a goad for Old Tuys. She decided to stay at the farm no longer than a month. She would get a job in the Capital. 268) 帰郷後3日目に Daphne, Old Tuys のレイヨウ狩りの犠牲に[テキスト H]／Daphne の葬儀には、あの Michael Casse 夫婦も参列。
- 1951年- Ralph, 小説執筆への焦燥、大衆に支持される作家から批評家に支持される作家への変貌の必要性／Daphne の「悲劇的な死」をテーマにした小説執筆を目論み、植民地に／Michael Casse 夫婦の案内で Daphne の墓に、Daphne にしか聞こえなかった the go-away bird の鳴き声が Ralph にも聞こえる、Ralph 追われるように帰国。以後、the go-away bird の鳴き声がオブセッションに。

テキスト

A. [導入部]

All over the Colony it was possible to hear the subtle voice of the grey-crested

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

lourie, commonly known as the go-away bird by its call, ‘go’ way, go’ way.’

It was possible to hear the bird, but very few did, for it was part of the background to everything, a choir of birds and beasts, the crackle of vegetation in the great prevalent sunlight, and the soft rhythmic pad of natives, as they went barefoot and in single-file, from kraal to kraal. (232)

[植民地中で、ハイイロエボシドリの微かな鳴き声を聞くことができた。「立去れ（ゴウエイ）、立去れ（ゴウエイ）」という鳴き声からゴウエイ・バードとして知られていた。その鳴き声は、聞こえるには聞こえるのだが、ほとんどだれも聞くことはなかった。なぜなら、ありとあらゆるものの一部にと化していたからである。他の鳥や獣の鳴き声、あまねくあたる強い日差しに野菜がたてるパリパリ音、そして部落から部落へと裸足で列になして行き来する原住民たちの柔らかかできずミカルな足音。]（以下、すべて拙訳）

B. [Daphne の出自と Chakata の言語偏向あるいは植民地における立ち位置]

Though it was a British colony, most of the people who lived in the dorp and its vicinity were Afrikaners, or Dutch, as they were simply called. Daphne’s father had been Dutch, but her mother had been a Patterson from England, and since their death she had lived with her mother’s relations, the Chakata Pattersons, who understood, but preferred not to speak Afrikaans. Chakata was sixty, he had been very much older than Daphne’s mother, and his own children were married, were farming in other colonies. Chakata nourished a passionate love for the natives. No one had called him James for thirty-odd years ; he went by the natives’ name for him, Chakata. He loved the natives as much as he hated the Dutch. (233)

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

[イギリスの植民地だったのだが、町やその界隈の住人たちの大半はアフリカンス語を話す人たちだった、彼らは簡単にダッチと呼ばれていた。ダフネの父親はダッチだったが、母親はイギリスのバターソン家の出だった。両親の死後、ダフネは、母親の親戚のチャカタ・バターソン家の人たちと生活してきた。チャカタはアフリカンス語を解せたが、話すのを好まなかった。チャカタは60歳だった。ダフネの母親とは年齢がかなり離れていた。子どもたちは結婚していて別の植民地で農場を経営していた。チャカタは原住民に強い愛情を抱いていた。30余年の間、だれも彼のことをジェイムズと呼ぶことはなかった。原住民の名前であるチャカタで通っていたのである。チャカタは、ダッチを嫌悪するぐらいに原住民を愛していた。]

C. [Daphne, Chakata と Old Tuys の関係について Donald から聞き出す]

‘Why does uncle Chakata keep on Old Tuys?’

‘I don’t want to lose my job,’ he said.

‘Upon my honour,’ she said, ‘If you tell me about Old Tuys I shan’t betray you.’

‘The whole colony knows the story,’ said Donald, ‘but the first one to tell it to you is bound to come up against Chakata.’

‘May I drop dead on this floor,’ she said, ‘if I tell my Uncle Chakata on you.’

‘How old are you, now?’ Donald said.

‘Nearly thirteen.’

‘It was two years before you were born—that would make it fifteen years ago, when Old Tuys...’

Old Tuys had already been married for some time to a Dutch girl from Pretoria. Long before he took the job at Chakata’s he knew of her infidelities.

They had one peculiarity : her taste was exclusively for Englishmen. The young English settlers whom she met in the various establishments where Tuys was employed were, guilty or not, invariably accosted by Tuys : ‘You committed adultery with my wife, you swine.’ There might be a fight, or Tuys would threaten his gun. However it might be, and whether or not these young men were his wife’s lovers, Tuys was usually turned off the job.

....

Tuys hoped eventually to get a farm of his own. Chakata, who knew of his troubles, took Tuys on to learn the tobacco sheds. Tuys and his wife moved into a small house on Chakata’s land. ‘Any trouble with the lady, Tuys,’ said Chakata, ‘come to me, for in a young country like this, with four white men to every one white woman, there is bound to be trouble.’

There was trouble the first week with a trooper.

....

Hatty Tuys was not beautiful : in fact she was dark and scraggy. However, Chakata not only failed to reform her, he succumbed to her. She wept. She said she hated Tuys.

....

[Donald said] ‘Tuys found out. He went to Mrs. Chakata and tried to rape her.’

‘Didn’t it come off.’

‘No, it didn’t come off.’

‘It must have been the whisky in her breath. It must have put him off,’ said Daphne.

‘In England,’ said Donald, ‘girls your age don’t know very much about

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

these things.’ (239-40)

「どうしてチャカタおじさんはオールド・トイズを雇い続けているの？」

「ほくは仕事を失いたくない」とドナルドが言った。

「オールド・トイズのことを教えてくれたら、わたし、名誉に誓って、あなたのことを絶対裏切ったりなんかしないわ」

「植民地中の人たちがこの話は知っているのだ、でも、最初に君にそれを教えた人間は、チャカタと対決せざるを得なくなる」とドナルドが言った。

「チャカタ伯父さんにあなたのことを告げ口するくらいなら、わたし、ここで死んでもよくってよ」とダフネは言った。

「いくつになった？」とドナルドが言った。

「まもなく13よ」

「君が産まれる2年前に起きたことだから、もう15年になるな」

オールド・トイズは、プレトリア出身のダッチの娘と結婚してしばらく経っていた。チャカタのところでは仕事をする大分前から、トイズは妻の男癖の悪さは知っていた。相手の男たちにはひとつの特徴があった。彼女の好みはもっぱらイギリス人男性だったのだ。トイズが雇われていた先々で出会った若いイギリス人の移住者たちは、実際やっついようとまいと、トイズに必ず声をかけられた。「てめえ、オレの女房に手を出しやがったな、この野郎」。喧嘩になると、トイズは銃で脅した。しかし、こういった若い男たちがトイズの妻の愛人であろうとなかろうと、結局、トイズは仕事を辞めるのが常だった。…。

トイズは、いずれ自分の農場を持ちたいと思っていた。タバコ栽培について知りたと思っていたチャカタは、厄介事は承知の上でトイズを雇い入れた。トイズ夫妻はチャカタの地所の小さな家に越して来た。「トイズ、奥さんがらみの厄介事は全部このわたしに、いいか、この国みたいな若い国では、白人男4人に白人女は1人だけだから、厄介事は避けられないからな」とチャカタは言った。

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

1 週目にして白人騎馬警官との厄介事があった。…。

ハティ・トイズは美しくはなかった。実際、色黒で痩せぎすだった。しかし、チャカタはハティに行いを改めさせるどころか彼女の誘惑に負けてしまったのだ。ハティは泣いた。トイズが嫌いだと言った。…。

(ドナルドが言った。)[トイズにばれたんだ。トイズはチャカタ夫人のところに行つて、犯そうとしたんだ。]

「でも、できなかったんでしょ」

「そう、できなかったんだな」

「ウイスキー臭い息のせいね。それでトイズはやる気をなくしたのよ」とダフネが言った。

「イギリスでは、君ぐらいの年の女の子は、そういうことには疎いんだからな」とドナルドが言った。]

D [Tuys による Daphe 襲撃と Donald による阻止]

‘Stop there,’ she heard him [Old Tuys] say, ‘or I shoot.’

Her hand was on her revolver, and it was her intention to wheel round and shoot before he could aim his gun. But as she returned she heard a shot from behind him and saw him fall. Daphne heard his assailant retreating in the bush behind him, and then on the veldt track the fading sound of bicycle wheels.

Old Tuys was still conscious. He had been hit in the base of the neck. Daphne looked down at him.

....

There were few white men in the Colony who rode bicycles, and only one in the district. Bicycles were used mostly by natives and a few schoolboys.

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

All the children were away at school. Daphne's unknown protector was therefore either a passing native or Donald doing his rounds. Moreover, there was the question of the gun. Few natives, if they owned firearms, would be likely to risk betraying this illicit fact. And few natives, however gallant, would risk the penalty for shooting a white man. (251-252)

[[立ち止まれ、でない、撃つぞ]とオールド・トイズが言うのをダフネは聞いた。

ダフネの手にはりボルバーが握られていた。ダフネは、オールド・トイズが銃を構える前に、弾倉を廻転させ撃つつもりだった。しかし、振り向きざまにオールド・トイズの背後で銃声がし、オールド・トイズが倒れるのをダフネは見た。それから、草原の道を自転車が走り去るのを耳にした。

オールド・トイズは意識があった。首筋のところを撃たれていた。ダフネはオールド・トイズを見下ろした。…。

自転車で乗っている白人なんて植民地にはまずいなかった、この地方となるとたったひとりだけだった。自転車は、その大半が原住民か、あるいは、ごく少数の生徒たちにしかならなっていた。子どもたちは全員が学校だった。だれか分からないダフネの庇護者は、従って、通りがかりの原住民か巡回中のドナルドということになる。さらに、銃の問題もあった。原住民であれば、銃を所持していたにしても、このような違犯をおかすものなどほとんどないだろう。勇気があったとしても、白人銃撃の処罰まで受けるリスクをおかすものなどないだろう。]

E [Greta との訣別の場面]

'I don't want to keep you against your will, Daphne. But if you leave now you must compensate me fully. Then, if you want to go away, go away.'

'Go'way. Go'way, go to hell,' said the budgerigar, which had now risen to its perch.

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

‘And then there’s the bird,’ said she. ‘I bought it for you this afternoon. I thought you’d be thrilled.’ She began to weep.

‘I don’t want it,’ said Daphne.

‘All my girls have adored their pets,’ Greta said.

‘Come here darling,’ said the bird. ‘Go’ way, go to hell.’

Greta was doing a sum. ‘The bird is twenty guineas. Then there’s the extra clothes I’ve ordered—’

‘Go’ way. Go’ way,’ said the bird. (261)

「ダフネ、わたしはあなたの意志に反してまであなたを留めおきたくはありません。しかし、いま出て行きたいというのであれば、十分な賠償をしなければなりません。その上で、立去り（ゴーウエイ）たければ、立去り（ゴーウエイ）なさい」

「立去れ（ゴーウエイ）、立去れ（ゴーウエイ）、行っちまえ」とセキセイインコが喋った。セキセイインコは止まり木にとまっていたのだった。

「あら、それから、この鳥もいましたわ。あなたのためにと、今日の午後、購入しましたの。とても喜んでくれるものと思っておりましたのに」グレタは泣き出した。

「欲しくありません」とダフネが言った。

「わたしがお世話しましたお嬢様方はみなさんペットをととても愛してくれました」とグレタが言った。

「こっちにおいでよ、ねえ。立去れ（ゴーウエイ）、行っちまえ」と鳥が言った。

グレタが請求金額を計算しだした。「この鳥が20ギニー。注文しておいた特別のお衣装もありますし—」

「立去れ（ゴーウエイ）、立去れ（ゴーウエイ）」と鳥が鳴いた。」

F. [Ralph による Daphne への離別の表明]

Three weeks later he wrote from his mother’s address to suggest that she

move out of the flat. He would make a settlement.

She telephoned to his mother's house. 'He won't speak to you,' his mother said. 'I'm ashamed of him, to tell the truth.'

Daphne took a taxi to the house.

'He's upstairs writing,' his mother said. 'He's going away somewhere else tomorrow. I hope he stays away, to tell the truth.'

'I must see him,' said Daphne.

His mother said, 'He makes me literally ill. I'm too old for this sort of thing, my dear. God bless you.'

She went and called upstairs, 'Ralph, come down a moment, please.' She waited till she heard his footsteps on the stairs, then she disappeared quickly.

'Go away,' said Ralph to Daphne. 'Go away and leave me in peace.'
(268)

[3週間後、母親の住所からダフネ宛にレイフから手紙があった、フラットから退去するようにしたためられていた。関係を清算したいと。

ダフネは彼の母親に電話をした。「息子はあなたとは話しませんよ。本当のことを言えば、わたしは息子のことを恥じているのです」と母親が言った。

ダフネはタクシーをひろって、母親の家まで行った。

「レイフは2階で執筆中です。明日、レイフは出かけることになっています。本当のことを言えば、家には戻って来て欲しくないと願っています」

「私は彼に会わなければなりません」とダフネは言った。

「息子は本当にわたしの具合を悪くさせます。この種の問題にはわたしは年をとり過ぎています。本当に、あなたに神さまのご加護ありますように」と彼女は言った。

母親は行って2階に声を掛けた「レイフ、お願いだから下におりてきてちょうだい」
母親は階段にレイフの足音がするのを聞くや、すぐに姿を消した。

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

「立去れ（ゴウエイ）、立去れ（ゴウエイ）、オレのことはもう放っておいてくれ」とレイフはダフネに言った。」

G. [Daphne の植民地への帰還とその殺害]

Makata の Kraal への訪問の途中での殺害。殺害の情報は省略法で提示。語り手による焦点化（=外的焦点化）の被焦点化子の移動による省略法。つまり、殺害直前の Daphne から Toys が銃を持ってレイヨウ撃ちに出掛けたという情報を得た Chakata への被焦点化子の移動。

She had become unused to trekking any distance. Her energy ebbed after the first mile. A cloud of locusts caught her attention and automatically she stopped to watch anxiously whether the swarm would settle on Chakata's mealies or miss them. It passed over. She sat to rest on a stone, disturbing a baby lizard. 'Go'way. Go'way,' she heard.

Daphne called aloud, 'God help me. Life is unbearable.'

A house-boy came running to Chakata who was round by the tobacco shed resting on two sticks.

'Baas Tuys is gone to shoot buck. The piccanin say he take a gun to shoot buck.'

'Who? What?'

'Baas Tuys with gun,'

'Where? Which way?'

'Is gone by north. The piccanin have seen him. Was after lunch piccanin say, he talk that he go to shoot buck.' (269)

[ダフネにはもはや距離の如何にかかわらず歩く習慣がなくなっていた。最初の1マイ

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

ルでエネルギーを使い果たした。イナゴの大群がダフネの注意をひき、ダフネは無意識裡に立ち止まり、この大群がチャカタのトウモロコシ畑に降り立つものかそれとも見過ごすものか心配になって注視した。イナゴの大群は通り過ぎて行った。休むために石に腰を下ろした。そのせいでトカゲの赤ちゃんが出て来た。トカゲの赤ちゃんが「立去れ（ゴーウエイ）、立去れ（ゴーウエイ）」と言うのをダフネは聞いた。

「神さま、どうかお救い下さい。生きて行くことに耐えられません」とダフネは声に出して言った。

タバコ小屋の脇を2本の杖をついて見回っていたチャカタの元に下働きの少年が駆けて来た。

「トイズの旦那がレイヨウ撃ちに出掛けていった。トイズの旦那はレイヨウ撃ちに銃を持ち出したってクロンボの子が言っています」

「だれが？ なにを？」

「トイズの旦那が銃を持って」

「どこだ？ どっちだ？」

「北の方に行った。クロンボの子が見かけたって。お昼ご飯の後だって、レイヨウ撃ちに行くって言ってましたって」

H. [Ralph, Daphne の墓参時に the go-away bird の鳴き声を聴く]

After Ralph had looked at the inscription, 'Daphne du Toit, 1922-1950', he walked up and down. He looked blankly at the gravestones and noticed one inscribed 'Donald Cloete'. This name seemed familiar, but he could not remember in what way. Perhaps it was someone Daphne had talked about.

'Go'way, go'way.'

That was the bird, just behind Daphne's grave. She had often mentioned

the bird.

‘It says go’way, go’way.’

‘Well, what about it?’ he had said to her irritably, for sometimes she had appeared to him, as in a revelation, a personified Stupidity.

She would tell him, ‘There’s a bird that says “Go’way, go’way”,’ without connecting the information with any particular event; she would expect him to be interested, as if he were an ornithologist, not an author.

‘Go’way, go’way,’ said the bird behind Daphne’s grave.

He heard the bird at some time during each day for the next six weeks while he was completing his tour of the rural spaces. (272)

[[ダフネ・ドゥ・トワ 1922-1950]] という墓碑を見た後で、レイフは行ったり来たりした。ぼんやりと墓石をみていたが、「ドナルド・クローティ」という墓碑にふと気が付いた。その名前には聞き覚えがあったが、どうにも憶いだせなかった。多分、ダフネが話題にしたことのある誰かなのだろう。

「立去れ（ゴーウエイ）、立去れ（ゴーウエイ）」

それは鳥だった。ダフネの墓の陰にいた鳥だった。ダフネはこの鳥のことをよく言っていた。

「立去れ（ゴーウエイ）、立去れ（ゴーウエイ）って鳴くのよ」

「それがどうしたって？」とレイフが苛立って言ったこともある。というのも時々、ふと啓示にでも触れたかのようなダフネの振舞いに、ダフネがバカそのものに見えたからだだった。

ダフネはレイフに、話の脈絡がなんらないなかで、「立去れ（ゴーウエイ）、立去れ（ゴーウエイ）って鳥が鳴くのよ」と言ったものだった、まるで、レイフが作家ではなく鳥類学者でもあるかのように。

「立去れ（ゴーウエイ）、立去れ（ゴーウエイ）」とダフネの墓の陰で鳥が鳴いた。

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

レイフは、地方まわりの取材旅行を終えるまでの6週間毎日毎日この鳥の鳴き声を聞いたのだった。]

5. Daphne の生の軌跡と 〈中心-周縁〉, 〈中心なき周縁=クレオール〉という現実

- | | |
|-------------|-----------------|
| (1) 宗主国-植民地 | (2) 植民地内的状況 |
| 英国 | 英国系 |
| | アフリカーナー (クレオール) |
| | カラード |
| 南アフリカ | ネイティヴ |
| (3) 英国内部* | |
| England | |
| クレオール化 | |
| 歴史的-現実的状況 | |

クレオールの存在 (クレオールとしてのアイデンティティ) である Daphne のいるべき場所: 周縁 (クレオール) → 中心 (英国) の希求 → 中心 (英国) の周縁化 (クレオール化) → 非在あるいは遍在。

中心-周縁の二項対立を超克あるいは脱構築するクレオール (常に既にクレオール化しているという事実あるいは真実)。

このような事実・真実を知らぬままに、復讐の念すらなくなったオールド・トイズによってレイヨーと誤認されての若いダフネの死。

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

植民地主義の犠牲という読み方：すぐれてクレオール的な存在であるダフネがアイデンティティの根拠として求める「英国性」(“Englishness”)。しかし、英国 (England) もまた既にクレオール的な存在ではなかったのか？

*英国の歴史とクレオール性

ブリトン／ローマ／アングロ；サクソン；ジユート；チュートン（ゲルマン民族）／ノルマン人

England > Angles Land

6. おわりに：Daphneの死は悲劇的か喜劇的か？

ポスト植民地主義的読解を超えて

最後に書き込まれた「カトリック作家として書くことの Spark の自己韜晦」

「鳥類学者 (an ornithologist)」のモチーフをめぐって

‘Birds. Is he an ornithologist then?’

‘No, I think he’s R.C.’

‘A *man*, darling, who studies birds.’

‘Oh! Well, no, he said no, he’s not particularly interested in birds.’

‘How extraordinary,’ she said. (273)

[[鳥。それじゃ彼って鳥類学者なの?]

「いや、彼はカトリック教徒だと思うよ」

「ねえ、それって鳥を研究している人って意味よ」

「おお、じゃ、違うよ、彼は鳥には特に興味なんてないからね」

「まあ、なんておかしなことなのでしょう」とマイケル・キャスの妻が言った。]

周縁から中心へ、そして中心なき周縁へ

「作家」-〈鳥類学者〉-「カトリック」の意味するところは？

Ralph=R. C.=Spark?: カトリック的な〈神-人間〉の関係

〈神の如き〉全知の視点 → 全知の〈神〉の視点の採用

Spark 自身の全知の〈神〉の視点の採用: 自己言及

Spark にとって、小説家として書くこととは？

そして、カトリック作家の三人称の偏愛のわけとは？

使用テキスト: Muriel Spark. *All the Stories of Muriel Spark*. New York :
New Direction, 2000.